

武蔵野日曜聖書講筵

人生の歌

——詩篇第23篇——

1993年1月10日

小池辰雄

人生の歌 聖名のゆえにこそ 死の陰の谷を涉るとも 油を注ぐ キリストの中に住む 35／
53 破れの一如 日本キリスト各召団代表者殿 キリスト証者

【詩篇23】（私訳）

ダビデの絃歌

1 エホバこそはわが牧人、
私は何も困らない。2 若草の野に彼は私を臥させ、
憩いの水汀に伴れゆき給う。3 わが魂を彼は甦らせ、
義しき道に導き給う、聖名のゆえにこそ。4 また縦い死の陰の谷を渉るとも
私は禍害を恐れない。

あなたが共に在ますから。

あなたの笞、あなたの杖、それが私を慰める。

5 あなたはわが眼のあたりに筵を備え給う、
わが諸々の敵前で。6 あなたはわが首を油漬けにし給う、
ああわが酒杯は溢れた。7 誠に善福と恩恵とが私を追跡する、
わが生命の日の限り。8 かくて私はエホバの家に住む、
日に日が続き果てるまで。

●人生の歌

詩篇第23篇は人生の歌です。天国と地獄と煉獄がある。詩篇150篇のうちで、もし一篇を選べと言われたら、私は文句なしにこの23篇を選びます。詩篇の代表的なものと思う。



「エホバこそはわが牧人^{まきびと}、
私は何も困らない。」

イスラエルの民は遊牧の民で、牧者に羊が導かれている、自然の彼らの在り方が詩篇23篇です。

「神さまが牧人^{まきびと}であって自分たちはその羊だ」

という。羊の中で一番素晴らしい羊はイエス・キリストです。だから、キリストのことを「羔^{こひつて}」

という。「神の羔」とはイザヤ書にも出てくる言葉です。

「エホバ」は神さまのこと。これは「ヤーヴェー」と「アドナイ」という二つの言葉からできている。「ヤーヴェー」とは、イスラエル人がいう、

「実在するもの」

という意味です。「アドナイ」というのは「わが主」ということ。

「わが実在の主」

というのが「エホバ」という合成語の本当の意味です。合成語だからおもしろいから、

「エホバ」

という言葉を私はいつまでも使っているわけです。

神さまは牧人で、私たち人間は羊で、これに従っている。そして、神さまの言いつけに、導きに、完全に文句なしに従ったのはイエス・キリストひとりです。それだけの完全な従いということは私たちにはできない。そして、最後は十字架です。

「我に従わんとする者は己が十字架を負いて我に従え」

とキリストが言われたのは、ご自分の体験と未来のことを、

「やがて自分は十字架につく」

そのことを言われた。

「十字架を負う」

というのは、どんな苦難も負って、そしてこれに打ち勝っていく。そのためには、聖霊の力がいります。

十字架とキリストの霊。十字架を本当に受けとると、キリストの霊が入ってくる。十字架・聖霊は分かつことができない。

「汝らに火を投ぜんがために来た」

とキリストが言われた。ルカ伝の12章49節、50節。「火」というのは聖霊のことです。

「お前たちに霊を投ぜんために来たのだが、思い迫ることいばかりぞや。だけれども、その前にやる必要がある。自分は十字架にかかって、そして、お前たちの罪を全部贖わなければ、それはできないのだ」

と。十字架にかかれば、一応死んでしまう。それから、キリストは復活します。復活して



から、今度は聖霊を与える。だから、

「十字架と復活と聖霊」

は離すことができない。「火」即ち聖霊はペンテコステの時に降った。そして、ガラリと皆は変わった。

「我れキリストと共に十字架せられたり。最早我れ生くるにあらず」

と。その次に、パウロは何と言ったかというのと、

「キリスト、わが中にありて生き給うなり」

と言った。これは聖霊のキリスト、キリストの聖霊です。

藤井先生が『旧約と新約』という雑誌を書いていた。122号で終わるんですが、112号に――先生が天界にいく約一年前です――

「教会を召団と改訳せよ」

と書いてある。「教会」という訳はうまくない。「エクレシア」というギリシヤ語は、

「召されたる者の団体」

という意味ですから、「召団」という。「教会」という訳はダメなんだ。「教えの会」ではない。

「召団」

というのが本当なんだ。

「無教会」

というのは本当はおかしい。キリストを信ずる者たちの群れというものは、ひとつの団体なんだから。

●聖名のゆえにこそ

²若草の野に彼は私を臥させ、

憩いの水汀に伴れゆき給う。

「牧人」という字は「ローエー」という字です。「若草」はもちろん緑です。家畜が喜んで食べるところの草です。緑の草と水に導きたもう。美しい情景です。

わが魂を彼は甦らせ、

義しき道に導き給う、聖名のゆえにこそ。

「聖名のゆえにこそ」

というのが大事です。

「聖名のゆえに、神さまの名のゆえに」

導いてくださるので、こちら側のことのためではない。

「聖名が崇められるために」

導いてくださる。我々の「救い」というのは御利益ではない。救われたのは、神さまの栄光がそこで現れる。それが救いのすがたなんです。だから、他の人にそれを伝えざるを得



ない。あなた方一人ひとはみな伝道者です。

「その歓びを分かたざるを得ない」

というわけです。

「若草の野、憩いの水汀」^{みぎわ}

ということを具体的に魂の世界でやったのが、イエス・キリストです。福音書をご覧になると、キリストの在る所には、その身边には、若草があり憩いの水汀があるというような、「天国」を現しながらキリストは歩いている。福音書というのはそうなんです。福音書はイザヤ書35章の現実なんです。それを皆みそこなってしまうと、

「ありがたし」

と言っているながら、御利益的に受けとっている者は皆躓いてしまつてダメになる。

「その歓びが、神さまの栄光がそこに現れている」

という自覚が大事なんです。我々の救いは

「聖名のゆえ」

である。聖名のためである。救われんがための救いではない。

1 エホバこそはわが牧人^{まきびと}、

私は何も困らない。

2 若草の野に彼は私を臥させ^ふ、

憩いの水汀^{みぎわ}に伴れゆき給う。

3 わが魂を彼は甦^{よみがえ}らせ、

義しき道^{ただ}に導き給う、聖名のゆえにこそ。

この1〜3節は天国的な現実です。これは全部「聖名の故に」私たちをそのようにしてくださっている。「聖名の故に」というのは観念ではない。

「それは天国的な現実で、神の、キリストの栄光が現れている」

ということを自覚していただきたい。それは即ち――

「救われている」

ということとは

「証者である」

ということ――神・キリストの栄光を証している者だというのが、救われている現実なんです。あまり

「救い、救い」

なんて言わない方がいい。神さまの栄光の現れている証者です。キリストは証者である、キリストは神の証者である。我々は証し人である。「私は救われた人」ではなく、

「私は証し人である」

という自覚の方がいい。キリスト中心、神中心がこの「聖名の故にこそ」ということです。



●死の陰の谷を渉るとも

そこまでが天国で、今度は地獄だ。

4 また縦^{たと}い死の陰の谷を渉^{わた}るとも

私は禍害^{わざわい}を恐れ^{おそ}れない。

あなたが共に在^いますから。

あなたの答^{こた}、あなたの杖^{つゑ}、それが私を慰める。

イスラエルには水のない渴^{かわ}いた谷^{わだ}がいくつもある。

「死の陰の谷」

とは、猛獣や悪い外敵が潜んでいて、現れたりしてやつつけられる。悪い強盗みたいなやつと猛獣、これが「死の陰の谷」です。

「あなたが一緒にいてくださるから、キリストがわがうちにありたもうから、禍害^{わざわい}を恐れ^{おそ}れない」

ということ。「答^{こた}」というのは先端に鉄の金具がついていて、悪いやつをやつつける武器です。「杖^{つゑ}」というのは羊を導く普通の杖です。そのようにして守られるから

「自分は恐くない、地獄を通っても困らない、あなたの答と杖が慰めてくださるから。地獄的な現実でも勝ちます」

ということですよ。

●油を注ぐ

天国、地獄ときて、今度は煉獄です。

5 あなたはわが眼^{まなこ}のあたりに冠^{かん}を備え給う、

わが諸^{もろ}々の敵前で。

6 あなたはわが首^{くしゅ}を油漬^{あぶら}けにし給う、

ああわが酒杯^{さかずき}は溢^{あふ}れた。

「油^{あぶら}」というのは「聖霊」のことです。「油を注ぐ」というのは

「聖霊を注ぐ」

こと。「油を注がれたる者^{あぶら}」というのは

「キリスト者」

ということですよ。「メシヤ」という字がそういう字です。特別に油を、神の霊を注がれたる者が、定冠詞がつくと、これはキリストのことになる。「クリストス」というのは「油をそそがれたる者^{あぶら}」という意味です。だから、「クリスチャン」という。私は、

「あなたはわが首^{くしゅ}を油漬^{あぶら}けにし給う」

と訳した。首だけでなく、全身がキリストの聖霊で満たされる。

「わが酒杯^{さかずき}は溢^{あふ}れた」



と。原文はそれでいいが、

「われという酒杯は溢れた」

と言った方がいい。その内容は、

「われというあなたの酒杯は油で、聖霊で溢れました。全身が聖霊で満ちて漲みなぎっています」

ということです。

●キリストの中に住む

キリストから来るところの霊を

「聖霊」

という。聖なる霊。神さまの言は全部これを

「聖書」

という。アッシジの聖フランシスとか、聖アウグスチヌスとかいうけれども、それは後で神さまの「聖」を賜っているのであって、

「聖者」

というのは、神聖の

「聖を賜りたる者」

ということだ。アッシジのフランシスでも、アウグスチヌスでも、若い時は散々悪いことをしているから、伝記を読むと分かりますが。けれども、終りになって、全部それから抜け出した。女のかたは割合とスーッとしているけれども、男というやつは非常に劇的なんだ。悪いこともだいぶやる。けれども、終りになって、この聖の世界に入れられる。聖者とは

「聖を賜りたる者、聖とされた者」

です。ダビデでもそうです。

首かしらばかりでなく、全身に聖霊が注がれる。私たちはもちろん、旧約でもキリストの霊で読んでいく。だから、詩篇23篇がものすごいことになる。我という酒杯が溢れてしまう。

7 誠に善福さいわいと恩恵めぐみとが私を追跡する、

わが生命いのちの日の限り。

8 かくて私はエホバの家に住む、

日に日が続き果てるまで。

「善福と恩恵とが私を追跡する」

と、もとのヘブライ語はそういう意味を持っている。

「エホバの家に住む」

は我々からいうと、

「キリストの中に住む」



です。

「かくて私はキリストの中に住む、地上の生涯が果てるまで」

と、旧約の聖書でも何でも皆、キリストの光でもって見る。

「エホバ」

と書いてあれば、そこに

「キリスト」

をみる。イエス・キリストというのは正直、大変なひとですから。これは天下無比です。お釈迦さんがどんなに偉くたって、キリストにはかなわない。お釈迦さんは最後に悟ったけれども、12歳のキリストがもう神さまを、父なる神を完全に意識している。だから、

「私は父の家に居るのが、あなた方はお分かりにならないのですか」

と、お父さんお母さんに反論した。キリストの意識しているのは「父なる神さま」のことです。だから、キリストというのは

「言い逆らいの徴」

そのものです。

「私は地に平和を投ぜんためではなく、むしろ剣を投ぜんために来たのだ」

と言った。

「いろいろな事が分かれてしまう、本ものかウソかが分かれてしまうぞ。本もの、世界に入りたい者は私にやって来なさい」

というわけです。

イエスというのは大変な^{ひと}霊止です、無限無量の内容をもった方ですから。優しくもあるし、力強くもあるし、大抱擁であるし、宇宙的であるし、もう何とも言いようがない。福音書を読んで、そこにキリストがどんなことを言っているか、どんなことをしているか。全部これはキリストの顕現ですから。現れですから。

「どういう意味か」

ではない。読んでいて、その文字の奥から力がくる、その響きが伝わってくるような読み方をしたら、それが本当の読み方です。解釈ではない。意味ではない。聖書はドラマですから、ドラマの中に自分を投げ入れる。そういう読み方をぜひやっていただきたい。

「信仰を何年やった」

とか、

「信仰暦が古い、新しい」

もありはしない。即刻その世界に、毎日新しくどんどん入っていく。だから、私みたいな者が、もうかれこれ90歳になるけれども、なぜ元気かというと、キリストという元の気があるから元気なんです。「元気を出せ」ではない。

「元気が私を通って出ていきますよ」



ということ。「がんばれ」なんて、頑張る必要は何もない。上から力がやって来るから。よく、「がんばれ、がんばれ」

というが、御苦労さんなはなしだ。くたびれてしまう。そうではなく、上から力がくる。

蛍光灯はいくら頑張ったって大したことはない。太陽の光は無限無量の力を、光を、熱を持っていて。要するに、神さまの光というのは太陽の光なんだ。人間はそういうのに身体をまかせる。ところが、全存在をまかせたらエライことになるということに気が付かない。私の気合は、皆さん、お分かりになりますね。分かるといっても、頭ではない。全存在です。

● 35 / 53

旧約聖書では、何といつても創世記は大事です。それから大事なのは出エジプト記の最初の方。申命記は愛の律法です。サムエルはおもしろい。けれども、何といつてもあとは詩篇です。しかし、旧約の詩篇には愛の面が欠けている。詩篇は、こちら側から神さまに祈っているような態勢やいろいろな場合があるから、それは結構なんです。

ところが、預言書というのは上から、神さまから預言者を通して語ってくる。特に預言書の中で大事なものはイザヤ書です。イザヤ書には親しまれるといい。特に、40章から66章まで。1章から39章までが第一イザヤ、40章から55章までが第二イザヤ、56章から66章までが第三イザヤ。イザヤ書の53章が十字架、35章が聖霊の歓びの世界です。

「35 / 53」(53分の35)

53 (イザヤ書53章＝十字架の現実) 分の35 (イザヤ書35章＝聖霊の現実)

これも覚えておいてください。

大切なところは何回も繰り返し読んで読むことが大事です。そうすると身についてしまう。「一回読んで終り」ではしょうがない。読むことが同時に祈りであり、同時に賛美である。そういう境地です。とにかく、聖書というのは凄い本ですよ。考えられた書ではないから、頭で書いた書ではないから。

ヨブ記は、あまり私は特に読めとはいいません。エレミヤという預言者は非常に心の預言者、人間性の深い預言者です。エレミヤ記も親しむといい。エゼキエルは祭司みたいです。イザヤ書とエレミヤ書には親しんでください。ホセア書も深い愛の書ですけれども。

何といつても無駄のないのは新約聖書です。新約聖書は初めから終りまで一つも無駄がない。毎日のご飯は食べ忘れても、聖書は食べ忘れないということ。

「我を喰らえ、我を飲め」

とキリストが言った。聖書を食べ聖書を飲むようなことにならないとダメです。その中心はキリストですから。これは大変なものだ。新約聖書一巻にかなう本は世界中にないでしょうね。いわゆる悟りの世界の仏教には深遠なことを言っているものもありますけれども、新約聖書の生命にはかなわない。



●破れの一如

信と行が一如の世界を動いていたのが賀川豊彦です。

「信仰のみ」

と言って、行為の方は大して思わないような、二段構えはダメなんだ、一如の世界に入らないと。どんなにそれが破れた存在であっても、在り方が一如であることが、その精神が大事なんです。破れの一如でいい。聖霊の世界はそういう世界です。力が来る。破れの器でありながら、もの凄い力を持っている。研究で聖書が読めるか。聖書は身体で読む本であって、研究して読む本ではない。乱暴な言い方けれども、本当にそうだもの。

本当に人間は独りです。

「神―キリスト―我」

の「一」の直結の線がなかったらダメです。

ローマ書の7章を見てみましょう。

「¹⁸我はわが中、すなわち我が肉のうちに善の宿らぬを知る、善を欲すること
我にあれど、之を行う事なければなり。¹⁹わが欲する所の善は之をなさず、
反って欲せぬ所の悪は之をなすなり。²⁰我もし欲せぬ所の事をなさば、之を
行うは我にあらず、我が中に宿る罪なり。²¹然れば善をなさんと欲する我に
悪ありとの法を、われ見出せり。²²われ中なる人にては神の律法を悦べど、
²³わが肢体のうちに他の法ありて我が心の法と戦い、我を肢体の中にある罪
の法の下に虜とするを見る。²⁴噫われ悩める人なるかな、此の死の体より我
を救わん者は誰ぞ。²⁵我らの主イエス・キリストに頼りて神に感謝す、然れ
ば我みずから心にては神の律法につかえ、肉にては罪の法に事うるなり」(ロ
マ7・18～25)

「自分はそういう分裂なんだ、分裂的現実なんだ」

とパウロは正直言っている。

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし」(ロマ8・1)

と。8章にいくと、完全に聖霊の世界に入ってしまったっている。

「矛盾にして単なる矛盾に非ず」

という世界です。それが人間なんだよな。だから、大事な態勢は平伏しです。平伏しの魂には聖霊が宿る。そうでない所には聖霊は来ない。思ひ上がりは絶対にダメ。そして、そこには権威がある。本当の権威は平伏しにある。

「我は心砕けたる者と共に住む」

という。神さまは上からやってくる。そして、それを本当に慰め励ます。力を与える。

「キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放



したればなり」(ロマ8:2)

これは完全に勝利している現実です。

「それでは、7章の終りの方は過去のパウロか」

なんて、そうじゃない。現実のパウロです。現実のパウロが二重構造になっている。けれども、8章のパウロが勝って進んでいく。

「あるがままの私は7章の終りだが、死の体^{からだ}だが、しかし、キリストにある自分はそのものとは次元の違ったところにいるんだぞ」ということです。

日本キリスト各召団代表者殿

さて、今度、こういう文章を各召団に送ります。

日本キリスト各召団代表者殿

日本キリスト召団の機関誌「エン・クリスト」は各召団代表者合議のもとに、1980年夏季号を創刊として発足したのであります。

その際、小池が年齢的にも、また信仰歴からいっても、代表的地位にあったことは各位の御存じの通りで、機関誌を出版するにしても、東京が具体的な仕事を担当するのが自然であったので、爾来^{じらい}今日まで、十二年あまり東京召団の役員数名協力のもとにやらせていただきました。

「エン・クリスト」誌の編集は専ら小池がいたしました。西方の代表的地位の奥田昌道兄と電話で話し合いをすることは随時ありましたが。

執筆者が単数であった昔の「曠野の愛」誌の場合は簡単でしたが、執筆者が複数の「エン・クリスト」を編集するには諸要素、諸事項を考察しなければならぬので、簡単な操作ではありません。とにかくそれを小池は貫いて来ました。

勿論、私の過誤、不備、不均等、失礼などがあつたでしょう、その点は茲^{ここ}におゆるしを願うものであります。

さて、十二年という年数は、ある充満的な感を与えます。聖書を見ても、十二という数がいろいろな事態で出ていることは御存じのとおりであります。特に、最終巻たる黙示録には十二乃至十二倍数、しかも最終の2章には大切な数値として幾種類の事態に於て現われています。

日本キリスト召団も茲に十二年を閲^{けみ}して時期満ち^{とき}たりで、各召団がその独自性に於て自由に展開すべき時期来れりと感じております。或は、地域的に二、三の召団が協力の形態でなさることも御自由であります。

東京召団に於ては、小池が此の2月でかぞえ年九十歳となりますので、わが人生の



最終期を迎えます。小池は今後（既にスタートは切っておりますが）、ある一つの詩をものすべき使命を賜っていますので、それに専念せねばなりません。従って、他のことに力を分散させる余裕がありません。勿論、集会は月3回従来通り続行します。

そんなわけで、「エン・クリスト」詩編集の如き責任ある操作は最早不可能なのであります。

今まで主筆であり、ひとりで編集して来た在り方は今後ではできませんので、小池はこの仕事から退かせていただきます。それゆえ、いずれかの召団がバトン・タッチなさるといふのなら、御一任しますが、そうでない限り、「エン・クリスト」誌は53号を以て終刊とならざるを得ません。

過ぎし十二年間のキリストの御導きを平伏して感謝しております。

今後は先にも述べましたように、各召団が自由に自主的に独自性を以て聖霊の導きのままになさる時期来たれりと、私は感じ、そのことを心から各召団にお勧めしたいわけであります。各召団は夫々のパンフレットを御作製なさるのが伝道の上にもプラスなことと存じます（すでに実行しておられる向きもありましょうが）。

此の如き形態は日本キリスト召団の分裂ではなく、キリストが見えざる親しき大指導者として、今後も福音伝道を展開してやまざる日本キリスト召団の転進であります。しかも、各召団の独自性と独立性を重んじますので、他の召団員が干渉したり、屋上屋の計らいをするような行為は絶対にゆるされません。そのことはパウロがロマ書第15章20節で述べている通りであります。

時あってか、伝道の講演会や集会を有志合同で展開することは望ましいことと思っています。

以上、到らぬ叙述ですが、善意を以て御賛同願います。

このような愚生の意見に御異論はないと思いますが、各召団の代表者各位が、夫々の召団員とお話の上、1月末までに御返答くださることをお待ちいたします。

終りに、この十二年間の主にある篤き有形無形の御協力御友情に対して心から感謝いたします。今後も我ら各召団が主にある信愛関係を続けてゆくには、十字架・聖霊の主にあつて祈りゆくことが肝腎と存じます。

小池はこと伝道のためとあらば、都合のつく限り、御協力することを惜しまぬものであります。

なおこ

尚茲に一言させていただくなら、『小池辰雄著作集』全十巻は、既往70余年聖書に親しみ、聖書を中心とした研究、解説、私訳、感想、告白、証言、伝道紀行等の散文及び詩歌の集大成でありますので、各召団の方々が時折、小池の手紙と思って繙いてくださらば、まことにありがたく存じます。特に第一巻と第十巻には親しんでいただきたくあります。



各召団員が今後、当方へ直接御注文なされる場合には、各巻二千元（送料共）でお頒ちいたします。送本の中に振替用紙を入れておきますから、それで御送金くださらば結構であります。これらのことは当方の係員にやっております。

以上、各召団の代表者各位から、夫々の召団員に然るべき方法で充分お伝えくださるようお願い致します。主にありて

信愛なる各召団代表者殿

主キリストの御前に平伏して

合掌

1993年1月10日

小池辰雄

●キリスト証者

もう、各召団は自由にやってもらう。東京も自由にいきます。それぞれの自由独立を尊重する期がきた。ちょうど12年で時が満ちた。いつまでも東京召団が中心ではダメなんだ。それぞれ自由自在にやってください。こと伝道となれば、私は出かけていくからね。我々はキリストの証者である。皆さん、これをよく自覚してください。「クリスチャン」なんていうよりか、「キリスト証者」と言ったほうがいい。主の証者である。この言葉を本当に内側で受けとると、もう「十字架・聖霊」の現実がはつきり入る。

「35／53（53分の35）でございます。イザヤ書53章と35章でございます」

と。イザヤ書35章は素晴らしいね、福音書の現実をそのまま言っているんだ。

「1 荒野とうるおいなき地とはたのしみ、沙漠はよろこびて番紅の花のごとくに咲きかがやかん。² 盛んに咲きかがやきてよろこび且よろこび且うたい、レバノンの栄をえ、カルメルおよびシヤロンの美しきを得ん。かれらはエホバのさかえを見、われらの神のうるわしきを見るべし。

自然界も神さまの栄光の顕れなんだ。

³ なんじら萎^{なえ}たる手をつよくし弱りたる膝をすこやかにせよ。⁴ 心さわがしきもの^{むかい}に^{おそ}対て言え。なんじら雄々しかれ懼^{おそ}るるなかれ、なんじらの神をみよ、刑罰きたり神の報きたらん、神きたりてなんじらを救いたもうべし。⁵ そのとき聾^{めしい}者の目はひらけ聾^{みみしい}者の耳はあくことを得べし。⁶ そのとき跛^{あしなえ}者は鹿の如くにとびはしり、啞^{おうし}者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで、沙漠に川ながるべければなり。」（イザヤ35・1～6）

聖歌の「いつかは知らねど」はこのイザヤ書35章なんです。

